

都市風景と田園風景の望ましさの要因に関する検討

松下 雄吾

我々の暮らしている日本では、地域によって特徴的な風景が見られる。近年では、景観を守るための条例が施行され、その結果日本固有の風景が復活し観光客が増加したという例も見られ、風景がその土地に与える影響は大きいといえる。したがって、風景のどのような要因が望ましさに関与しているかを明らかにすることは、生活空間の質の向上、および地域の活性化に繋がると考えられる。なお本研究では、風景はそこに存在している建物や自然物といった景観(視覚的刺激)と車の音や生き物の声、川の音といった音環境(聴覚的刺激)により構成されているものであると定義した。

我々がある風景を望ましいと感じる時、多種多様な風景の構成要因の中で、様々な要因が複雑に関連しあって最終的に望ましいと評価すると思われる。望ましい風景を目指すのなら、この複雑な関連性を明らかにしなければならない。

そこで本研究ではまず、都市風景と田園風景の望ましさを規定する評価項目をそれぞれ決定した。そのために評価グリッド法を用いた視聴覚実験を行った。この手法により、実験参加者が風景の望ましさを評価するのに用いた評価項目を評価語として得ることができた。得られた評価語の中で出現頻度の高いものを本研究で使用する評価語として採用した。また評価グリッド法で得られた評価語間には階層関係が見られるため、望ましさを頂点とする評価語の階層的な概念図を作成した。

その後、視聴覚実験において実験参加者には、先述の概念図で使用した評価語を基に構成されたSD尺度で、都市風景および田園風景の印象評価を行ってもらった。この実験で得られた評価尺度値を用いてグラフィカルモデリングを行い、先に示した概念図に対応する連鎖独立グラフを求めた。続いて、このグラフを初期モデルとして共分散構造分析を行い、都市風景および田園風景の望ましさを頂点とした評価構造のパスモデルを求めた。さらにそのパスモデルの適合度を改善するために、変数の因果関係を再検討してモデルの修正を行った。最終的に、適合度の高いパスモデルを得た。

得られたモデルにおいて、第1変数群の変数から第2、第3変数群を経て、第4変数群の「望ましい」へと順番に繋がるパスについてどのような経路をたどっているのかを検討した。また都市風景と田園風景のパスモデルに見られる共通点や相違点を基に、モデルの特徴を比較することで風景の望ましさを規定する要因について考察を行った。

本研究の成果をまとめると次の通りである。両風景のパス図には共通して「緑が多い」という評価語が見られた。したがって、望ましい風景には緑の多さが重要な要素であるということが示唆された。また風景の望ましさについて評価するとき、自分の生活圏内に似たような風景がある場合、呈示された風景の中で快適な生活を送ることができそうかどうかを評価基準としていることが示唆された。逆に似たような風景がない場合、呈示された風景が非日常的であるかどうかを評価基準としていることが示唆された。他にもその風景に足りない要素を補うような評価項目が風景の望ましさを規定する要因であることも示唆された。(環境行動学)